

## 1. 「パリ協定」を考えるに当たっての世界秩序における矛盾

2015年12月12日、第21回気候変動枠組条約締約国会議(COP21)において、参加国196カ国が「パリ協定」を採択しました。2016年4月22日には、ニューヨークの国連本部で同協定の署名式が行われ、参加した国は175カ国に達しています。序文で紹介した通り、この時同時に「パリ協定」に批准した国は、海面上昇による水没の恐れある島嶼国など15カ国でした。その後、9月4日に中華人民共和国の浙江省の省都杭州市で行われた首脳会合G20の前に、米国と中国が「パリ協定」への批准声明を発表しました。世界の2大GHG排出国が批准したことから、「パリ協定」の発効も2016年内に成立する可能性が極めて高くなったと言えます。

COP21に参加した国の数が196カ国であるということは、国連加盟国すべてであり、その意味で「パリ協定」をすべての国が採択したことは、批准はともかくとして地球温暖化の阻止に対する考え方に対しては、賛成票を投じていることとなります。見方を変えれば、自分達人間がもたらした地球に迫りくる脅威に対して、阻止することに協調したことにとなります。1648年にカトリック、プロテスタントを宗教とする国々が締結した“ヴェストファーレン(ウェストファリア)条約”の関係国も、もちろん条約の主旨に鑑みれば、「パリ協定」を採択したことは言うまでもないことだと考えます。ただし、欧米先進国を中心に再び“ヴェストファーレン条約”の精神に則り、国のあり方が見直され、これに準じたのは、第一次・第二次世界大戦が終結した後だと言えます。なお、第一次世界大戦後の中東の国々の位置づけは、“サイクス・ピコ条約”に基づきフランスとイギリスならびにロシアによって、恣意的に国境線が引かれるなど、変則的な国家形態に置かれ今日に至っています。中でも、現在のシリアでは、アサド政権と反アサド派、それに民族と宗派の異なるスンニ派とシーア派等の宗派間による戦い、さらにIS(イスラム国)とアサド政権を支持するロシアが加わることで、戦いは極めて複雑かつ厳しい状況となっています。

ここで言いたいことは、前述の「パリ協定」には、これら争いの絶えない中東そしてアフリカの国々も参加し、同協定について採択していることです。戦争ならびに紛争は、地球環境の破壊、そして地球温暖化の加速要因であることは、誰もが疑う余地はないと思います。環境破壊防止、地球温暖化の阻止は賛成だが、戦いは続ける。これは大いなる矛盾です。

戦争には莫大なお金が掛かります。その戦費はどこで工面されているのでしょうか。これこそ、今話題になっている「租税回避地」(タックスヘイブン)が大きくかかわっています。2016年4月に明らかにされた「パナマ文書」(パナマリークともいう)には、アサド大統領の肝入りの人物＝会社経営者が、租税回避地を使って投資で儲けた多額の資金を、同じく租税回避地の会社(ペーパーカンパニー)にストックし、シリアの兵站原資(兵器や弾薬の購入資金)に使っていることです。「パナマ文書」は、パナマにある「モサック＝フォンカセ法律事務所」の実態が、知らない人物からリークされたものです。同事務所は、ドイツ人のユルゲン・モサックとパナマ人のラモン・フォンカセの二人が作り上げた、パナマで最大といわれる法律事務所のようなので、そして、租税回避を助けるオフ

シヨアビジネス(代表的な仕事は、ペーパーカンパニーの設立と運営)の支援事務所でもあるようです。

「パリ協定」の批准が迫っていることに対して、「パナマ文書」を引き合いに出したのは、多くの誠意ある国々が真面目に地球環境を守る活動をする一方で、地球を、国を、そして地域を破壊するための資金増殖を図る組織が存在することです。

私たちは、どうも地球環境保全活動のあり方を、根本的に間違えてはいないだろうか、「パリ協定」は茶番ではないか、問題を投げかけ、活動の本来のあり方を再検討すべきではないだろうか、私はそう考えます。“ヴェストバーレン州”(ノルトライン)は、ドイツの 16 州ある一つで、人口は 1,784 万人とドイツの最大の州です。17 世紀に起こったプロテスタントとカトリックとの 30 年間の戦い後、大小関係なく互いの国を認める“ヴェストファーレン条約”が結ばれた。これが欧米の安定した都市国家の原型と言われています。

何とも皮肉ではありませんか。パナマリークの源である「モサック＝フォンカセ法律事務所」を設立したユルゲン・モサック(1948 年生れ)は、「ヴェストバーレン条約」の誕生の地である“ヴェストファーレン州”の出身であるということです。さらに、現在、ユルゲン・モサックはパナマロータリークラブのメンバー、すなわちロータリアンであるということです。その人物がオフシヨアビジネスを主業務とする人物だと考えると、何を持って「品格」「高潔性」と言えばよいのでしょうか。

地球温暖化対策を真剣に考えるその裏に、とんでもない落とし穴があるとするなら、私たちはどのような行動をとるべきでしょうか。この後に、「パリ協定」、「ESG」、「座礁資産」、さらに深く「パナマ文書」について触れようと考えていますが、結局、国ならびに経済活動のあり方を掘り下げることになります。それには、タックスヘイブンと言う闇(例えばテーブル上で 1 ドルの支援を申し出るが、アンダーテーブルでは 10 ドルを引き抜くやり方)に触れないわけにはいかないと思います。環境問題を一つとっても、こうした困難な事象について、理解を深め、本当のあり様を見出す必要があることを認識すべきです。

## 2.「パリ協定」発効までの現状について